



畜産経営者の団体です

全日畜だより

第 66 号

2025 年12月3 日
<https://www.alpa.or.jp/>

SDGs ワークショップ（帯広会場）を開催

全日畜 SDGs ワークショップ（帯広会場）プログラム

1 ワークショップの概要

- ◎ 開催日 令和7年11月11日（火） 13:00 ～ 16:00
- ◎ テーマ 畜産DXとアニマルウェルフェアで開く経営の未来
- ◎ 会場 ホテルグランテラス帯広 2階「オーク」
〒080-0011 帯広市西1条南11丁目2番地 TEL 0155-23-3177

2 ワークショップの構成は「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成

◎ 開会

会場には道外から参加の畜産生産者なども含め約50名が参加
「話題提供」「事例発表」「意見交換」の三部構成の集会は
全日畜の 金子春雄 理事長の開会挨拶でスタート。

（写真：開会挨拶の金子理事長）



◎ 開会挨拶から

今朝早く青森を出発して開会ぎりぎりで間に合いました。
商系の1万6千の生産者で構成する全日畜は、北海道の皆様にも日頃から大変お世話になっており感謝申し上げます。
国政では初めての女性の首相が誕生した。国民目線での政治を期待している。畜産業では飼料が高値安定で、円安が続き、畜産経営の環境は厳しい。巨額の投資を回収しなければならず、まさに命がけの経営である。今日は北海道で頑張っている経営者のお話を聞かせていただき、安定経営をどうすればいいのか一緒に学びたいと挨拶。

◎ 話題提供者と事例発表者の紹介

第一部の話題提供では中標津町のファームノートデーリープラットフォームの 平様から、酪農生産におけるSDGs対応のモデル経営の実現を目指して、との講義です。
第二部の事例発表では、別海町の高橋牧場の代表 高橋様、士幌町の高橋牧場株式会社の 高橋様、芽室町の株式会社大野ファームの 大野様の3名を講師にお招きしました。

（写真：4名の講師のみなさん）

第一部 話題提供の講師紹介



(株) ファームノート
デーリープラットフォーム
代表取締役
平 勇人 様
(酪農)

第二部 事例発表の講師紹介



高橋牧場
代表
高橋 正明 様
個人経営（酪農）



高橋牧場 株式会社
代表取締役社長
高橋 竜 様
(肉用牛)



株式会社 大野ファーム
代表取締役社長
大野 泰裕 様
(肉用牛)

第一部 話題提供 株式会社 ファームノートデーリプラットフォーム

代表取締役・獣医師 平 勇人 氏

「酪農生産におけるSDGs対応のモデル経営の実現を目指して」

◎ 論旨

- SDGsは社会的に要請されているが、自社は何をすべきか考えて、SDGsの目標を「ウエディングケーキモデル」を用いて立体的に表示し、構造を分かりやすく表現した。
- 底辺に環境（Biosphere）、次に社会・パートナーシップ（Society）、上に経済（Economy）で、SDGsの目標が分類されている。（写真：講師の平氏）
- SDGsの5つのPとは、人（People）、経済（Prosperity）、環境（Planet）、調和（Peace）、連携（Partnership）である。今の時代の経営においては、SDGs的な取り組みは、やらざるを得ない。酪農経営は課題だらけなので、それらの課題に経営として取り組むにはSDGsは関係ない、とは言えない。自社としてはまずは利益を出すことが重要。会社が利益を出してはじめてSDGsの取り組みも成り立つ。
- 酪農において、Peopleは「酪農に係る人の幸せ」、Prosperityでは「酪農経営体の持続可能性」、Planetでは「環境・牛との調和」、Partnershipでは「全てとのつながり」として、SDGsと接点がある。
- 基幹的農業従事者は、2022年の116万人から、2040年には35万人に減ると予想しているがこれは希望的観測だと考える。2022年の50代以下の基幹的農業従事者数は23万人なので、もっと減少するはず。酪農は1万戸から3千戸程度に減るのではないかな。
- 自分は兵庫県の非農家の出身で、家族は兵庫県において、単身で中標津に来ている。FDP（ファームノートデーリプラットフォーム）のビジョンは、やりたい人が誰でも牧場経営できる仕組みを作ることである。多産多死から少産少死の酪農へ3年1産牛群を作り1,000日搾乳を目指している。
- 家族経営中心では、経営規模が大きくなって人を雇用したとき、従業員は家族の中に入り、全員が従業員となるので、従業員のキャリア形成が非常に難しい。また、我々は人件費を「コスト」から「目的」へ変えた。人件費アップはコストなので抑えるほうがよいが、人件費アップが目標の一つとなれば、それにつながるキャリア形成が目標となる。

（添付資料は、
講演資料のスライド No.17）



FDPとSDGsの接点

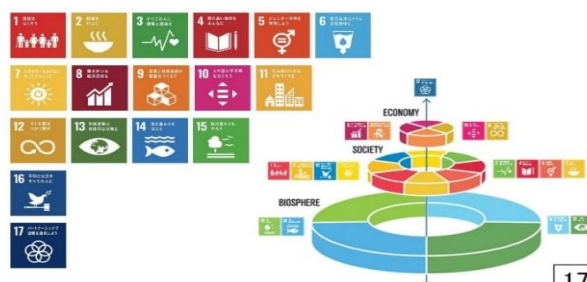
人: People

経済: Prosperity

環境: Planet

調和: Peace

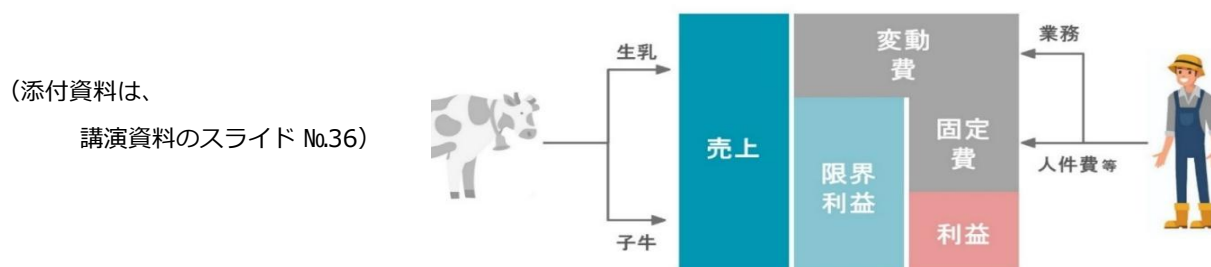
連携: Partnership



17

- ・収益性について、管理会計[*1]と月次決算[*2]の実施に取り組み、利益をしっかりと出す。環境について、家畜排せつ物の固液分離により、スラリーからの温室効果ガス削減を行い、J-クレジット制度[*3]に登録した。環境対策はよさそうであれば、経済合理性を考えて実行する。
- ・赤字経営の酪農経営の運営代行により先方の収益を改善した。また、赤字経営の繁殖和牛120頭規模の牧場を、運営代行により預託育成340頭規模とし、黒字化した。他牧場の経営支援では、どのような経営状況でも、どのようなかわり方でも、問題としないで対応する。
- ・組織構造の整理と標準化により、責任と役割を明確化し、経営とプレイヤーの間に「マネジメント」を加えた。牧場経営では、意思決定に利用できるデータを収集して、活用する。業務の標準化を進め、自律改善する組織を作り、牧場の運営代行により経営支援して経営安定化を行っている。マネジメントでは、KPI[*4]をもとに生産課題・仮説とその解決について議論する。
- ・SDGsそのものを目標にするのではなく、社会や環境とのつながりを意識した経営実現のために改善を継続していくことが、結果としてSDGsの実現につながると考えている。

牧場現場に経営を実装する:財務情報のデータ化



36

※ 用語解説

[*1] 管理会計とは

経営者や各部門の管理者が経営判断や意思決定に役立てるための社内向け会計のこと。企業の状況に合わせて自由に情報を収集・分析し、業績把握や予算管理、コスト削減などを行う。

[*2] 月次決算とは

1カ月ごとの取引を締め、企業の損益や財務状況を整理して、経営判断に役立てるための社内向けの業務。年次決算の負担軽減や、迅速な経営判断、業績の早期把握を目的とする。

[*3] クレジット制度とは

省エネルギー設備の導入や再生可能エネルギーの利用によるCO2等の排出削減量や、適切な森林管理によるCO2の吸収量を「クレジット」として国が認証する制度。本制度は国内クレジット制度とオフセット・クレジット（J-VER）制度が発展的に統合した制度で、国により運営されている。

[*4] KPIとは

「Key Performance Indicator（重要業績評価指標）」の略で、最終目標の達成度を測るための中間目標のこと。最終目標（KGI：Key Goal Indicator）に至るまでの重要なプロセスを、定量的に評価するための指標として設定され、業務の進捗管理、効率化、軌道修正に役立つ。

第二部 事例発表

高橋牧場 代表役 高橋正明 氏

「アニマルウェルフェアの取組み」

◎ 論旨

- ・ 別海町で、草地面積80 ha、飼養頭数81頭の放牧畜産を経営。ホルスタイン（25頭）ブラウンスイス（9頭）ジャージー（4頭）、その他乳用種（36頭）その他肉用種（7頭）を飼養。放牧畜産実践牧場、AW畜産認証、有機飼料認証（放牧専用地のみ）の認証を取得。有機飼料認証では、補助金がなくなったので、来年は取得しない予定。ただし、いつでも認証を取れる体制は維持する。
- ・ 雑種を育てるのは、雑種強勢効果がはたらき、両親よりも優れた形質を示すことを期待しているためである。牛を番号ではなく名前で呼ぶ。搾乳牛と6ヶ月以上の育成牛を同一群として、放牧している。5月10日～11月初旬頃まで昼夜放牧。この期間カウベルを付けている。冬は8時～15時まで外で過ごす。悪天候は牛舎。1月、8月は分娩なし。エサはほぼ国産。育成牛舎をフリーバーンD型に改築し、牛のストレスを軽減している。
- ・ 「ありがとう牧場」に教えてもらい、GFMixBeef（Grass-Fed Mix Beef）プロジェクトを開始。牛を無農薬・無化学肥料の自然な放牧地で飼育し、濃厚飼料（穀物）の給与を最小限に抑える、循環型の放牧畜産を目指している。牧草地は、牧草だけでなく、いろいろな植物が入るミックスカバークロップを奨める。
- ・ AWの認証により、家畜の健康の向上、消費者や取引先への信頼性の向上、ブランドイメージのアップ、市場の拡大を期待している。
- ・ 高橋牧場では「生きものすべてを豊かにする」を理念に、① 放牧酪農を通して、環境、生態系を大切にしたい牧場を目指し、② コストより品質を優先し、顧客と信頼関係を築き、③ 五感で楽しめる牧場を価値観を共有し、挑戦し、④ 土の健康、牛の健康、人の健康、地球の健康を大切にし、⑤ ワンヘルスの考えに基づき、命をいただく責任を考え続け、⑥ 言葉より行動し、誰のためにつくるのかを常に問いかけている。



（写真：

Web参加の講師の高橋（正）氏）

（添付資料は、講演資料のスライド No.13、No.17）



国産飼料

スワデシー（国産品愛用）の精神
買ひものは投票
ちゃんと選ぶ事は経済そして世界を変える



「肉牛畜産DXまでの道のり」

◎ 論旨

- ・ 土幌町において、肉用牛交雑素牛を飼育。年間出荷頭数4,000頭、従業員13名で経営。ペンとノートの手書きの記録から、18年をかけてバーコードハンディによるIoTタブレットなどを活用するDX化までに至った。畜産DXでは、人の手を介さずに牛の世話をできないので、牛のIoTデータは人が作り、人がDXまで引き上げる必要がある。センサを付けてバイタルデータを収集するだけでは、畜産のDX化は進められない。
- ・ 牛の飼育作業中には、事務所、牛舎作業時を問わず、様々な記録が発生する。作業中に書いた作業のメモや、体重測定、牛舎移動などの記録は、電子化されていないので読みにくく、整理できない。以前の1冊のノートに作業記録を全て記入し、作業終了後に自ら入力する手間は大きく、それをこなせるスーパー従業員はいない。
- ・ 当初はデータ整理にエクセルを使用していたが、データを横断する検索や集計はエクセルでは無理があり、事実上不可能だった。LSM（Livestock Management）管理システムを開発し、管理システムを開発し、バーコードハンディターミナルを用いて、識別番号をもとに個体を特定し、作業記録の入力をその場で済ませるようにした。システムはクラウド上で稼働するので、ネットにつながればどこにいても利用できる。データはシステム内のデータベースに即時反映される。今や現場でノートに記録するものは何もない。
- ・ 導入時の識別センターからの個体データを自動取得し、事務所で入力するデータと現場でのハンディ入力データを自動で統合し、仕分けしている。土幌町農協への出荷報告書、予防注射済書、東京市場屠畜出荷伝票などの定型文書も、システム内の個体データを引き出すことで、自動的に様式に沿って作成できる。現在このシステムは、宮崎から北海道まで利用されている。



(写真：講師の高橋（竜）氏）



(添付資料は、講演資料のスライド No.9、No.10)

第二部 事例発表 株式会社 大野ファーム 代表取締役社長 大野 泰裕 氏

「循環型農業と持続可能な畜産の未来」

◎ 論旨

- 芽室町で肉用牛経営。和牛交雑（F1）肥育650頭、乳牛去勢肥育400頭、和牛500頭。出荷量は、和牛交雑（F1）毎月約60頭、乳牛去勢 毎月約125頭。従業員9名。畑65 ha（小麦、テンサイ、デントコーン、大豆）草地60 ha、原野15 haで経営。ブランドは「未来めむろ牛」「未来とかち牛」。「健康な人づくり」「健康な土づくり」「健康な牛づくり」の三本柱をかね、生態系や自然環境と調和した、「自分の牧場で牛を育て、堆肥を作り、作物を栽培して餌とする」地域内循環型の農業生産を実践。
- 畜産を学ぶためオーストラリアへ。エリック・川辺農学博士の「科学的な土壌分析に基づき土のミネラルバランスを整えれば、大規模でも有機的な農業が成り立つ」という話や、父・祖父から受け継ぐ伝統である「畑を耕しながら牛を飼い、糞を堆肥にして畑へ戻す」から、土づくり、畜産と畑作の両立を重視している。
- 畜産DXとして、哺育ロボットとセンサ技術、及びクラウド型の牛群管理システムを導入。畜産DXにより、終業時間は17:30、残業は月当たり数時間、年間に1度6連休取得を可能とし、今は4週8休へ改善し、休める畜産を実現する。これは、日々の作業の自動化や省力化、チームで業務を平準化できた結果である。これにより牛の世話の質を下げることなく、効率化できた。
- AWとして、エサによる健康管理のほか、牛舎では換気や温度管理の自動化、子牛時期は一頭ずつハッチで管理するなど、牛にとってストレスの少ない環境づくりを行っている。
- 地域や消費者とのつながりで、牧場直営のカフェ「COWCOW Village」を2014年にオープン。学校教育で芽室町の小学校で食育の授業の講師などを行っている。有機農業に向け、オーガニック畜産モデルを模索し、環境対策としてバイオガス発電、COWCOWソーラー発電を実施。農場HACCPを取得し、北海道の畜産分野では初のJGAPを取得した。
- タブレットを見ながら作業計画や牛の様子を共有し、データに基づいた成果・年一回の課題発表会、経営方針や理念の再確認、などを行い、人材育成に努めている。地域内循環型農業や6次産化の強みがあるので、社員一人一人が自分の誇りを持ち、幸せに働き続けられる会社を目指し、畜産人口の減少に歯止めをかけたい。



（写真：講師の 大野 氏）

（添付資料は、講演資料のスライド No.5、No.7）

畜産DXへの取り組みと働きやすい職場づくり

畜産現場は「365日休みなく重労働」というイメージ。
作業の効率化に取り組み、一般企業と変わらない働き方を実現したい。

哺育ロボットとセンサ技術

生後3～4週間：個別ハッチでひとの手で朝晩ミルクを給与
以降：センサ付食槽を子牛に装着し、自動哺育ロボット牛舎で飼育
…子牛一頭一頭の飲乳量データ読み取り、
1日に必要なミルク量を自動給餌。
子牛の健康管理精度が向上。

クラウド型の牛群管理システム

牧場全体の情報を一元管理…牛の個体情報、胎前産、繁殖・出荷スケジュールなど
スマートフォンやタブレットで現場から常時アクセス可…スタッフ間で情報を共有

作業の省力化と労働環境の大幅な改善



アニマルウェルフェアの考え方と実践

飼料

- ・自社栽培や地元産へのこだわり
- ・選別・組み合わせで、抗生物質無投与
- ・乳酸菌を添加（臭い抑制、飼育環境にも良い効果）

→ 餌による健康管理

飼育環境

- ・牛舎では換気や温度管理を自動化
- ・おが屑・糞に加工し、自家製の堆肥を発酵・熟成させたものを敷料として使用
- ・子牛時期は一頭ずつハッチで管理

→ 牛にとってストレスの少ない環境づくり

⇒農場HACCP、JGAPを取得

※JGAP認定は北海道の畜産分野で初取得

第三部 意見交換（会場参加者も参加しての意見交換会）

◎ モデレーターのご紹介

ワークショップ帯広会場では、話題提供、事例発表、意見交換のモデレーターとして、全日基常務理事の引地和明氏をお招きしました。引地氏は、困難を克服する生産現場からの事例紹介もあった。厳しい状況の中の今後の経営活動のヒントなどを皆さんと意見交換しましょうとご挨拶されて意見交換会がスタート。



（写真は、モデレーターの引地氏）

◎ 主な質疑応答から

Q1（生産者 長嶋 氏） 牛には家畜共済番号、血統登録証番号など複数の番号体系があり混乱しがちだが、高橋（竜）さんの個体識別番号によって整理できるシステムはすばらしい。私の経営規模は飼養頭数200頭規模なので、高橋さんのハンディを使用するまでもないと感じている。しかし、外国人がスタッフに入っており、LINEグループにより情報共有を図っているが、データの整理に苦労している担い手の減る中で、高橋さんの実践により開発されたシステムで、情報を手軽に入力しデータ蓄積できるのはよいことである。AIが整理してくれる時代に、経営の解析を行うにはデータの蓄積が重要であり、データを容易に蓄積できるシステムの価値は高い。



（写真は意見を述べる 長嶋 氏）

Q2（生産者 高橋（憲）氏） 酪農経営で、DX化を進め、デサミス社のシステムを使用している。問題は、複数の機材を入れたときに様々なシステムが独立しているためデータを何度も入力する必要があり、無駄な手間がかかることである。システムを一本化できないものか。自分の農場は月次決はやっているが、今後は管理会計を取り入れたいと考えている。一般的には月次決算をしない農家は多い。平さんのところは、管理会計をして月次決算を行い、データ集積、意思決定用の経営分析、ゲノム解析までやってすばらしい。以前、全日畜のスマート畜産のWSで、農研機構の中久保さんがデンマークにおけるAI、IoT等活用畜産先進モデルを紹介してくれたが、国として一つのシステムを使用し、農家の入力は1回で済み、蓄積されたデータに基づき、農家からの問い合わせに対しアドバイスをしてくれるとのことだった。日本もそういうシステムにはならないのでしょうか。



（写真は意見を述べる 高橋（憲）氏）

（写真は、ステージから

質問に回答する講師のみなさん）



A1（高橋（竜）氏） 目的は、よい肉牛をつくることである。牛を改良することと、従業員の働き方は切り離して考えている。我々もLINEグループは別にあるが、LINEだけでは管理内容やデータが埋もれてしまう。LSMシステムで蓄積したデータは現状把握だけではなく、10年に1回、20年に1回程度発生する突然知りたい経営判断のときに利用される。経営上の課題が生じたときに、10年前のデータを取り出し、何をやるべきか整理するときに効果的である。データ収集では、データの活用にポイントを絞っている。

A2（平氏） おっしゃることは非常に重要なことである。私も農林水産省のスマート農業イノベーション推進会議（IPCSA）などで、牛のデータは統合すべきと発言している。全国的にデータを収集する「全国版畜産クラウド」が2018年から運用されているが、農家単位・牛単位で生産性向上が図れるとは言うものの、ほとんど何も使えていない。日本で統一システムを作っても役に立つのかどうか、難しい。使えるのは、自分たちの中でつなげられるものである。牛のデータだけでは不十分で、人の働き方のデータなどと統合しないと有効活用は難しい。ファームノートのシステムでは、採点すれば50～60点くらい。今の状況では統一したシステムが無理なので、他のシステムと連携して進めるべきだが、民間企業は独立して動いているので、連携できない。何が統一できるのか、パートナーシップを進め、利害の対立を越えたやりかたが必要である。

Q3（飼料メーカー関係者 山田氏）

業界の中で求められているのは、生産性を高めること、コストの削減、持続可能な経営として進歩することが大きなポイントになる。その中で、今回のテーマであるDXやアニマルウェルフェアを融合させることが大きなポイントになるのではないかと考えている。発表していただいた4戸の皆様はそれぞれの思いを、それぞれの視点で、いろいろな取り組みをされてきたんだと思っている。一長一短ではなかったんだというのが皆さん共通しているところではないのかと私は思っています。この集会の開催、全日畜さんに感謝しております。



（写真は意見を述べる 山田（和）氏）

Q4（飼料メーカー関係者 森山氏）

4人の発表を聞いて、やるべきことに対しどうすべきなのか示唆していただき、納得できた。取引をしている関係者の皆様にも話したい。平さんに質問です。説明いただいた管理会計について、農協の行っている組勘（組合員勘定）データは活用できるのか。また、他の牧場の経営支援・運営代行で、赤字経営から黒字に転換したとのことだが、支援された牧場の赤字は何が原因だったのか。



（写真は意見を述べる 森山氏）

A4（平氏） DPでは組勘のデータも利用できるようにしている。総勘定元帳データに合わせて管理会計の仕組みで月次決算を行っている。支援した牧場の赤字の原因は、経営体それぞれによって異なるので、自分の考えという前置きでお答えする。私は家族経営は重要だと考えるが、現在は厳しい外部環境の中にあり、経営における各種の数値、経験、管理実績などが、一致せず、ざっくりした感覚で経営を行っていることが赤字の要因かと思う。

Q5（モデレーター）

畜産DXにおいて、導入した様々なシステムや、技術体系を理解しているのは社長や管理者だけと思う。しかしDXは従業員、外国人労働者の仕事や、データ処理、生産活動、コスト、生産物価格にはねかえる。経営者は定期的に従業員にDXを勉強させる機会を設けているのか。

A5（高橋（竜）氏） 我々のLSMシステムは、スマホで使え、かつ使いやすく、シンプルにできている。このシステムは形を変えてスポーツ用品店、スーパーマーケット、財務管理、屠場でも使っている。やることはシンプルなので、ガラケーでもやれる。スマホができればなおよい。従業員はすぐにマスターするので、特段の勉強する機会はない。

A5（平氏） 当社のシステムでは、関係者は自分で何でも入力できるが、同じ内容でも表現が違くと分析しにくいことがある。データ品質の確保が重要で、これを全員が出来るわけではない。ガベッジイン、ガベッジアウト（Garbage in, Garbage out）[*1]となり、表記方法での英語カタカナの混在、文字の変換ミスといったことだけでもデータの質が落ちる。データの不正確さが経営判断の精度低下につながり、費用の増、粗利の減として経営にはねかえる。当社では人件費のアップが目的の一つだが、そのためには各メンバーが利益を考えて業務に当たることが必要。

※ 用語解説

[*1] ガベッジアウト（Garbage in, Garbage out）とは

直訳すると「ゴミを入れれば、ゴミが出てくる」。品質の悪い（無意味な、不完全な、誤った）データを入力すると、品質の悪い（無意味な、不正確な）結果しか得られない」という意味で、コンピュータサイエンスの分野で生まれ、広く使われるようになった。

Q6（一般参加者 川村（健）氏） 弊社は、食品のグルタミン酸、医薬品、化粧品、飼料などの製品を製造し、牛が排出する温室効果ガス（GHG）の削減に寄与するAjiPro-Lを開発した。この商品は、J-クレジット制度に登録されており、アミノ酸のバランスを整えることで生産性を維持しながら、利益をあげ、SDGsにおけるGHG排出削減に貢献する。6次産業化をやっておられる大野さんに伺いたいが、このような製品が学校を含むSDGsにおけるGHG排出削減消費者の意識に応え、需要が高まる雰囲気はあるでしょうか。



（写真は意見を述べる 川村（健）氏）

A6（大野氏） 環境にやさしい生産物は、ごく一部の消費者に買ってもらえると思う。差別化という視点で、ゼロカーボンに貢献するという説明が受け入れられることがあるので、販売がゼロということはない。ただし、一般の消費者の意識がそこまで高いのか疑問。自然食品を販売する生産者も多いが、値段が高くなるので、消費者はこの値段では買えないと感じ、限られた販売となる。ただし欧州、オーストラリアなどへ輸出するのであれば、これらの国では環境意識が高いので価値が認められるかもしれない。

Q7（モデレーター） 畜産経営では、家族経営、法人経営にかかわらず、DX投資に関心があるが、投資に見合ったリターンがはっきりとは見えていない。どういう経営において、どうすればDXによる利益が得られるか、投資するにはどの程度の規模が適当か、皆さんの経験からなにか物差しがあればお願いしたい。

A7（平氏） 直接投資の難しい時代で、北海道では多く酪農経営が赤字といわれ、飼料は高値で安定し、経営を圧迫している。最近は飼料価格も落ち着いて、黒字化する経営も出てきたが多くの経営体は次の世代のための再生産まで含めて黒字化できていないと思う。このような状況でDXに投資すれば、損益計算書（PL）上も赤字になる。これに投資すれば明確にリターンが得られるというものではないので、投資する場合にはお金ではなく、違うもの、例えば人、地域、次の世代にどれだけの利益をもたらすかを考えなければ手を出せないのではないかな。今は我慢のタイミングなので、これまで苦難を乗り越えてこられた先輩方に伺ったほうがよい。

A7（高橋（竜）氏） DX化への投資について、当方ではデータの蓄積と活用に注力しているので、経営の傾向を分析し、1頭当たりの投資額、畜舎1棟あたりの投資額などを見込んでいる。投資は未来を見通すもので、未来に回収できることが分かればいい。経営データを蓄積していれば、現在のデータに加え、過去のデータから予測できるものがあると思う。

A7（大野氏） これまでは生産増に向けた投資であったが、今後は生産増を目的としない投資が行われる。経営で問題なのは人件費の上がり方が大きいことで、給与を上げないと人が集まらず、農場を運営できず、経営が続かなくなる。現在は初任給で24万円を支給しないと企業として選ばれない。人件費を上げるために、経営を見直し、必要な投資を行わざるを得ない状況である。

推進委員から（高橋（哲）委員）

4名の発表者に感謝申し上げる。平さんの言うSDGsを目的とするのは難しいが、一方SDGsを勘案しないと経営できないという話の中で、3年1産牛群、1,000日搾乳と言われたが、これはどういう意味か。もう一点、高橋（竜）さんのお話で、LSMシステムでは、飼育管理の中で、飼育管理のデータも入力があったが、これはどのようなデータか。



（写真は推進委員の 高橋（哲）委員）

A8（平氏） 酪農家の皆さんからはそんなことはできないと言われたが、酪農で1,000日間搾乳するというのは、カナダの牧場で実績がある。この牧場では牛群改良を進め、1乳期の泌乳曲線が急上昇した。牛群改良という方法だけで1,000日搾乳ができるが、分娩だけ落とし込めない。酪農は生乳販売だけで利益をあげ、個体販売は追加収入と位置付け、分娩をのせられないか検討している。

A8（高橋（竜）氏） 以前、スタッフのなかで、引継ぎなしで帰宅したのがあり、エサをやったが何をやったか分からないことがあった。このようなことを防ぐため、エサをやるときの入力を改善した。すでに牛の頭数は分かっているので、これまでのメモのデータ化を工夫すれば、データが取れると思った。今では給餌量などを常に入力することで、今後の改善に活用するようにしている。

推進委員から（田中 委員）

感想を述べさせていただく。DX及びAWの実践について、高橋（正）さんと大野さんは、酪農・肉用牛にかかわらず土づくりを大切にしておられた。大野さんは堆肥を畑地に還元し、地域内循環に取り組んでおられる。高橋（正）さんはミックスカバークロップの放牧地という、ユニークな取組をしておられる。発表者の皆様それぞれに違いがあるが、現場での活動の深いところまで入っておられる。大野さんはDXで作業を効率化し働きやすい職場



（写真は推進委員の 田中 委員）

を築かれ、健康な人づくりに貢献しAWにもつながると感じた。平さんの説明と解釈には感動した。

推進委員から（川村（治）委員）

平さんの立体的なSDGsの図や酪農経営におけるSDGsの解釈はよく理解できた。別海の高橋（正）さんの放牧地について、分かれば教えていただきたいが、ミックスの牛を作るのはどういう考え方に基づくのか。掛け合わせによっては乳量が減ると思われるが雑種強勢を狙っているのか。高橋（竜）さんのエクセルによるデータ管理を見直し、ロジカルコンサルティング社の山崎さんの開発で、バーコードハンディのスマホでの読取り、入力技術が運用され、膨大なデータ量が蓄積され、多様なデータ解析ができるようになった。大野さんは、牛のセンサ付き首輪による個体管理を導入し、休日のとれる働きやすい職場を実現され、経営を発展させておられるが、これらはSDGs、AWに対応している。大野さんには是非、2020東京オリンピックへの食材提供農場としてアピールして欲しい。



（写真は推進委員の川村（治）氏）

A9（高橋（正）氏）（以下が、Web参加の高橋氏に、後日確認した回答「ミックス関係」）
クロスブリーディング（牛同士の掛け合わせ）の場合では、長命、連産が目的（健康で長生きさせることが目的）。

◎ モデレーターの引地 氏 からひと言

担い手が減少し、飼料価格が下がらない状況の中で、どのようにして困難を克服するか。以前提唱されていた規模拡大による解決は難しい。今後は、経営の中に入って、飼料、牛、人を別なコンセプトに基づいた活動を大胆に取り入れながら、乗り切っていく時代になった。本日のWSが、参加者の皆さんのためになればよかったと思います。

◎ 閉会挨拶から（全日畜 林 常務理事）

長時間のWSにご参加いただき、感謝申し上げます。4人の発表者の皆さんからは、貴重なお話をいただきました。理事長のいうように、飼料の高騰で経営は厳しさを増しております。全日畜ではJRA事業により、SDGs、DX、AWについて、参考となる事例の取りまとめを行います。畜産経営者の皆様の一助となればありがたいと思います。本日はありがとうございました。



（写真は、ご参加者の皆さんとの記念撮影）

（商系団体の略称表記について）

- 全日畜：一般社団法人 全日本畜産経営者協会
- 全日基：一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定金
- 工業会：協同組合 日本飼料工業会
- 〇〇県基金協会：一般社団法人 都道府県配合飼料価格安定基金協会